

昭和文学私記

石坂・阿部・横
光・梶井など

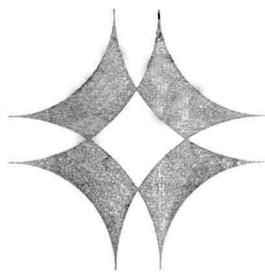
辻橋三

増訂版

昭和文学私記

——石坂・阿部・横光・梶井など——

辻橋三郎



国文学研究叢書

明治書院

神戸女学院大学教授。日本近代文学を専攻。

著 書

「近代文学者とキリスト教思想」(桜楓社)

「昭和文学ノート」(桜楓社)

「近代日本キリスト者文学論」(双文社出版)

以下主な共著

「近代日本文化とキリスト教」(教文館)

日本文学大系「倉田百三集 注釈」(角川書店)

「現代日本文学とキリスト教」(桜楓社)

その他。

現住所 京都市右京区常盤古御所町6



国文学研究叢書



昭和文学私記

——石坂・阿部・横光・梶井など——

定価 2,200円

昭和55年10月15日 印刷

昭和55年10月20日 発行

著 者 辻橋三郎

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 株式会社柳沢印刷

代表者 柳沢一郎

製本所 浦野製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03)292-3741(代)

振替口座 東京 3-4991番

©1980 Saburō Tsuzihashi 3391-24924-8305

昭和文学私記／目次

二つの『何処へ』について	3
——正宗白鳥のそれと石坂洋次郎のそれと——	
阿部知二の時代	50
——『冬の宿』を中心として——	
横光利一今昔	81
——私にとっての——	
※	
石坂洋次郎『若い人』以前	111
——「金魚」を中心として——	
梶井基次郎の方法	133
北条民雄の思想と文学	159
横光利一の古神道論	180
吉屋信子	199

日本浪漫派の再評価をこう見る	206
----------------	-----

※

社会主義系文芸評論	210
-----------	-----

——比較文学的観点からの——

「ナップ」について	233
-----------	-----

近代作家における家とキリスト教	249
-----------------	-----

大正末期、昭和初頭の徳富蘆花	259
----------------	-----

——『富士』について——

※

国文学者の創作「唱歌」歌詞	283
---------------	-----

——旧制高等女学校「唱歌」教科書における——

初出誌一覧	290
-------	-----

あとがき	293
------	-----

昭和文学私記——石坂・阿部・横光・梶井など——

二つの『何処へ』について

——正宗白鳥のそれと石坂洋次郎のそれと——

正宗白鳥の『何処へ』は、明治四一年、『早稲田文学』の一月号から、四月号まで連載された。石坂洋次郎の『何処へ』は、「胃瘵癰の巻」「怪しき夜の巻」「ホロモロンの巻」は、昭和一四年、『大陸』の七月号から十一月号まで、「かっこうの巻」は、『文芸春秋』昭和一五年一月号、「文学会の巻」は『日の出』昭和一七年一月号、「次郎長ぶしの巻」（「空晴れて」の題で）は、単行本『何処へ』初版本の出した段階で収載されたものである。「渡り鳥の巻」は、敗戦後、昭和二年二月、八雲書院から出版された『何処へ』改訂版において付加されたものだ。その際、全編に推敲がどこされたという（『石坂洋次郎作品集V「あとがき」」、新潮文庫『何処へ』平松幹夫執筆「解説」よりの孫引き）。

正宗白鳥は、自然主義文学のチャンピオンということになっている。当時に新聞は次のように報じている。

日露戦争後自己意識の盛んになった国民、殊に丁未思潮界に於て這般の自然主義が勃興し、四

十年の文壇を蹂躪したるは、葉の自ら開くが如く、極めて自然の結果であつた。

この記事の前には次のような表現がある。

日本に立した丁未文壇の新自然主義は決して独、仏、露の口真似ではない。

そして更に、この記事の冒頭は次のようなものであつた。

斯くあらゆる虚偽を排し、あらゆる偽善を排し、あらゆる便宜伝習的の道德を排し、赤裸々に自己を暴白し、直指直ちに現実の真に触れやうとした、霊と共に肉の力を主張した。(同じく

(二)『国民新聞』明四〇・一〇・二九、「同じく」とは、前日明四〇・一〇・二八の「明治四十年の文壇(一)」に同じということ、辻橋注)

以上の引用記事は、明治の自然主義文学が、漸く顯著なものとなつた「自己意識」、即ち個人主義思潮に招来されたものであり、しかも、日本という風土、歴史に胚胎した、独特固有なものであるということをいつているものである。白鳥の『何処へ』はその一つであつたことになるのである。そして、その主人公菅沼健次は、「主義に酔へず、読書に酔へず、酒に酔へず、女に酔へず、己れの才智にも酔へぬ」男であつた。「結婚」も「ノンセンス！」(中略)開闢以来億万人の人間の為古したとだ、(中略)家庭の実例はもう見飽きていい、また、「革命軍に加つて爆烈弾に粉碎されようとも、山賊に組して縛首の刑に合はうとも、結果が何であれ、名義が何であれ、自分を刺戟する最初の者に身を投げて、長くても短かくても、或は即刻に倒れてしまつてもよい」と思っている、日本

的自然主義の典型的な申し子であった。

さて、石坂洋次郎が『何処へ』を発表した昭和一四年の論壇においては、次のような言説が高く評価されていた。戦中戦後の知識青年層の心をとらえたあの『人生論ノート』（『文学界』昭一三・六〜一六・一〇、新潮文庫版で中島健蔵はこの書物を、三木清の「結論であると同時に、三木清という人間への入口」と解説している）の著者、戦争末期、左翼思想の持主として逮捕、敗戦後も釈放されず獄中死した、当時の最高の知識人三木清の文章である。

日本の使命と考へられる東亜協同体の建設は同時に世界史的意義を有するものである。そしてそれはまた必然に国内における新しい秩序の建設の問題を含んでゐる。日本は聖戦の使命貫徹のために主体的に整備されねばならず、この整備は国内改革なしには不可能であらう。私は今ここでもはや東亜共同体の理論乃至我々の謂ふ協同主義の哲学を展開する余裕がない。私は今日の青年知識層がこの大いなる時代にふさわしい若さを取り戻す日を待望したのである。（『中央公論』

昭一四・五）

当時の最新鋭の思想家でさえ、石坂が『何処へ』を書き始めた時点——昭和一四年代を「大いなる時代」といい、「青年知識層」に時代に「ふさわしい若さを取り戻せ」といつていたのであった。そして、石坂の『何処へ』の主人公、中学教師（旧制）伊能琢磨は、「徴兵検査第二乙種向きな細長い胸

体」の持主で、「顔麿美」をふりまく若い芸妓新太郎、下宿の主婦の妹、「白痴美」を漂わせた伊保子などに関心をもたれては、それを悪く思わず、やがて担任をしていた生徒玉田金助の姉艶子に、惹きつけられていく青年であった。伊能は「日本の使命」や、「東亜協同体の世界史的意義」などはもちろん、日本が一五年戦争のさなかにあることも毛頭考えていない、「青年知識」人であった。しかも「知性」の敗北にうちのめされている人物であった。とすれば、石坂の『何処へ』の主人公は、時代に背を向けた、国策に歩調を揃えようとしない、極端ないい方をすれば、非国民的日本人であったといふこともできるのである。そして、それはそれでやはり時代の子であったとはいえようと思う。かくて二つの『何処へ』の主人公は、ともに歴史の流れを、前者は陽画で、後者は陰画という形で象徴していることができるように考えられるが、どうであらうか。

二

二つの『何処へ』の登場人物と同じように、作者も又、明治、昭和の知識人であったことはいうまでもない。正宗白鳥は、明治三四年六月、東京専門学校文学科（現早稲田大学）を卒業、石坂洋次郎は、大正一四年三月、慶応義塾大学国文科を卒業している。わたしが大学を卒業した昭和一五年、全国の国公立大学の大学本科（旧制）の国文科（私立大学に多く設置されていた、高等師範部、専門部、その他国公立の専門学校／東京高師などを含む——現在すべて大学に昇格／を除く）卒業生は、合計二三五名であった

（『国語国文学年鑑昭和一五年分』靖文社、昭一八・一一）。昭和四七年における国公立大学（新制）の学生数は、合計百五十二万九千六百十三名である（『日本大学年鑑一九七三年版』／日本学術通信社、昭四八・四）。これらの数字をみると、いかに白鳥、石坂が最高の知識人であったかは喋々の要はあるまい（もっとも、大学卒業生がすべて知識人といえるかどうか、特に今日のように大量の大学卒業者の出る時点では疑問の点が多い）。この数字は目安としてあげていることだが、白鳥、石坂が真正正銘の知識人であることは、誰しも認めるところであろう。社会におけるそれぞれの作者の在り方は、白鳥は、卒業後直ちに早稲田付属の出版部に奉職、『何処へ』発表時は読売新聞社員であった。一方、石坂は、卒業した大正一四年六月、青森県立弘前高等女学校（現弘前中央高校）に奉職、その後、秋田県立横手高等女学校（現横手城南高校）、県立横手中学校（現横手高校）に転じていたが、『若い人』が、ある右翼団体から、不敬罪・軍人誣告罪で告訴されたことがきっかけとなって、昭和一三年一月一日付で依願退職した。一四年間の教員生活であった。石坂が『何処へ』の稿を起したのは昭和一四年七月だが、その年の三月に上京していたから、文筆生活に入って間もなくのことであったといえる。

結論から先にいえば、二人とも健全な常識人であったといつてよからうと思う。伊藤整は、有名な論文「逃亡奴隷と仮面紳士」（『新文学』昭二三・八）のなかで、日本の文士の性格を逃亡奴隷と規定した。そのなかで伊藤は、「二葉亭、藤村、鷗外、白樺系の諸家。ああ、外は虚無だ」といつて白鳥もその一人に考えているようだ。わたしはそうは思わない。これは中村光夫もいつていることだ。中村

の言葉をあげよう。

抜け目ない現実家の一面を持ちながら、終生純潔な理想の権化であり得た人、文学にたいする不信の言葉を吐きつづけながら、それらの言葉をそのまま文学と化し得た人、神にたいしても、同じ性質のどんでん返しを信じた人、このような青春の劇は、暗い色調の作品で曖昧にしか語られてゐませんが、実際は力と輝きにみちてゐた筈です。（『正宗白鳥 人と文学』筑摩書房版『現代文学大系第二巻 正宗白鳥集』解説、昭四一・一一）

この中村の白鳥評は、誠に慧眼というより他はない。伊藤整は、名著『日本文壇史 一二巻』（講談社、昭四六・八）において、『何処へ』を書いた前後のことを、詳しく叙述しているが、実務者として社会人としてひどくずばらな近松秋江と「よく一緒に女を買ひに行つた」とは書いていても、伊藤の綿密な調査に則った記述は、おのずから、秋江のずばらぶりを鮮明に描きあげること、白鳥の実直な執務ぶりを偲ばせるに十分なものであるのだ。つまり、白鳥もまた、「二葉亭、藤村、鷗外、白樺系の諸家」とひとしく、質実な生活者であつたといつていいと思うのである。見るがいい。明治四三年四月結婚以来、昭和三七年一〇月二八日死去するまで、あしかけ五三年にわたる円満な夫婦生活、象徴的にそのことを物語っているとみてよからう。後藤亮『正宗白鳥 文学と生涯』（思潮社、昭四一・七）、兵藤正之助『正宗白鳥論』（勁草書房、昭四三・一二）、大岩鉾『正宗白鳥論』（五月書房、昭四六・九）、田辺明雄『評伝 正宗白鳥』（学芸書林、昭五二・九）等の信頼のおける白鳥の評伝も、そのこ

とを物語って余さない。即ち、「生涯つまらないつまらない」(内村剛介『妄執の作家たち』河出書房新社、昭五一・六)と作品のなかで語り続けつつ、「旧家の大百姓の大旦那」としての「日本人の土の霊」(内村言)を内心深く秘めつつ、明治三七年十一月、『新小説』に処女作「寂寞」を発表以来、死没まで、実に足かけ五五年間、現役作家として営々として文筆活動を継続したのであった。白鳥の文筆活動が停止されたといえるのは、敗戦の前年、即ち昭和一九年だけで、その年のみ「徳田秋声のことども」(『新潮』一月号)一文にとどまっているのである。

要するに白鳥は、生涯、時代と自己とを、つねに客観的、相対的に把握しつつ、退屈のうたをうたい続けたといった方が正しいのではないかとすれば、逃亡奴隷どころではなく、いっそ、日本的な仮面紳士と呼んだ方がいらいぐらいの人ではなかったろうか。つまり、本質的には健康な良識人であったといっても、過言にはなるまいと思う。

さて、石坂洋次郎の方に移ろう。教員生活に終止符をうたせる役割を果たした『若い人』(『三田文学』昭八・五・一二・一二、但し断続的)における、未熟な故に危く美しく見える、退廃ときらきらした才智とが無秩序に交織されているところの、江波恵子という女主人公は、当時砂をかむような荒涼とした学生生活をおくっていたわたしの心をうずかせた女性像であった。石坂自身、「窮した生活に置かれていまして、その生活からなんとか自分の気持を解放しようというので、破壊型の女の子を誕生させて、奔放な動きをさせてみた。自分を救うためでした。僕自身の家庭生活が乱れて、ゆがんで、危機

に立ってしまったので、自分の窮した気持をあの作品を書くことで、立ち直らせるということまでは考えていなかったけれども、うつぶんを晴らす——と、そういうような気持で書いておった」という風に、江波恵子像創造の経緯、『若い人』創作の意図を、対談者河盛好藏に語っている（河盛編『作家の素顔』駸々堂、昭四七・一〇）。それに対して、河盛は、環境が悪いために江波恵子の才能を伸ばし得なかったもので、「江波恵子がいまなお健康なのは彼女の健康さだ」といつている。この河盛言は正鵠を射たものといつてよからう。学生時代のわたしの感想は、青春の感傷から感受した恵子像であり、正しくは本質的に健康な女性像が描きあげられていたのであると思う。そのような、本質的に健康な、ユニークな女性像を創造し得たことは、石坂自身のなかに人間としての本質的な健康性が盤踞していたからといってよからうと思う。石坂自身は、「窮した生活」「僕自身の家庭生活が乱れて、ゆがんで、危機に立ってしまった」ていたと語っているが、その文学的虚実の記録が、例の『麦死なず』〔文芸〕昭二一・八）なのである。しかし、石坂の生活が乱れたのは、妻がマルキシズムの嵐にまきこまれ、若いマルキシストにうつつをぬかしてしまったからであった。石坂自身、当時マルキシズムを無上完璧の思想と置いていただけに、石坂家の混乱はただならぬものであったにちがいない。この『麦死なず』のなかで、石坂その人と思われる五十嵐という教員は、妻のアキにふりまわされつつも、教師としての役割については、それを立派に果たしていたという風に読んでよからうと思う。

アキにはその後間も無く三度目の自殺未遂があったがこれは記すほどのこともない。——世間

も我が家も共産主義はあらかた終熄しゆうせきしたものであらう。(昭一・六・二二)

これは『麦死なず』の結びである。このような表現で結ばれる小説を書いている、県当局も、校長も、町民もこれといってとりあげなかったということは、教諭石坂洋次郎の公的生活に、非難さるべきものがなかったということになるのではなからうかと思われる。戦後最初の日本文学全集である、角川書店の『昭和文学全集21 石坂洋次郎』(昭二八・九)にある自作年譜に洋次郎は次のように書いている。

昭和十二年(1937)三十七歳

(前略) 昼間の勤めをもちながら小説を書いてゐたので、もと／＼丈夫でない身体を一そう酷使しなければならなかった。ちよつと風邪でもひくと、二週間三週間と欠勤して学校に迷惑をかけた。そのころの中等学校は、勤務状態がわりにのんびりしてをつたから小説も書いていたもので、いまのやうに教師の雑務が多くては、とても小説の勉強など出来ないであらう。また、学校当局や県の学務課が、私の小説勉強を見逃しておいてくれたことも、そのころの学校行政のやり方からみて、まつたく恵まれた異例のことだ。

わたしも、昭和一五年四月、九州の県立旧制中学校教師となり、県立の中等教育に携った経験がある。石坂のいうやうに、たしかにのんびりした一面はあったものの、『麦死なず』のような作品を発表してもこれというお咎めがなかったということは、彼自身の記す如く「まつたく恵まれた異例のこ